

研究論文

母子保健相談員からみた現代家族の育児様相

永谷 智恵・笹木 葉子・村田 亜紀子

(2011年12月22日受稿)

抄録： 本研究は、母子保健相談員がみている現代家族の育児の様相から、家族の育児支援への示唆を得ることを目的とした。母子保健相談を行っている相談員3名に半構成的面接をおこなった。その結果、現代の家族の心配・困りごとは【過度にアトピーを心配する】、【離乳食の悩み】、【母親の資格に関わる母乳の出方】【体重増加は関心の的】【健診は合否判定の場合】が抽出された。育児中の家族については【育児を知らない・子どもと関われないママ】、【ママの代わりにできるパパ】、【介入し過ぎる祖母・しない祖母】に、育児支援については【安心を与える育児支援】、【親が育ち合える場の必要性】が抽出された。現代家族の育児様相は、父親は協力的に育児参加しているが、祖母は介入し過ぎる・しないの両極化であること、母親は子どもの関わり方が分からない、自分への育児評価が気になっていることが明らかになった。今後の育児支援については、母親に安心を与える育児支援、世代を超えて親子が集まり、親同士が育ち合う身近な場が必要であることが示唆された。

I. はじめに

我が国の合計特殊出生率はベビーブームの1947年の4.54をピークに低下し続け、2005年には1.26の最低を記録し、ここ数年は1.39を維持している。子どものいる世帯の子どもの数は3名から2名に減少し、結婚しない人、結婚しても子どもを持たない人が増加した¹⁾。また、都市部に労働人口が集中し、単身世帯の割合の増加とともに、夫婦と子どもの世帯、3世代同居の割合が大幅に低下することにより、現代の少子化、核家族化が定着していった。さらに、近所付き合いの割合¹⁾は大都市で1割強となり、地域社会での人々の結びつきも弱くなった。現代の子育てをする親は、近所付き合いもなく、育児の経験や技術の伝承がないまま孤軍奮闘して²⁾、家庭外に育児支援を求めることが必要な現状である。更に、子育て支援に関する先行研究においても、子どもの成長を支援することに加えて、母親を支援する必要性が示されている³⁾。

このような社会背景の中で、現代の育児を行っている親や育児の実際はどのような状況になっているのか、現代家族の育児様相について明らかにしたいと考えた。親の身近で相談業務を行っている母子保健相談員に調査したので報告する。

II. 研究目的

母子保健相談員からみた現代家族の育児の様相を知り、今後の育児支援についての示唆を得る。

III. 研究方法

1. 用語の定義

母子保健相談員:ショッピングセンターや百貨店のベビー・子供用品売り場などにおいて、保健師・助産師の資格をもち母子保健相談を担当している者。以後、相談員とする。

2. 研究デザイン

質的記述的研究デザイン

3. 研究協力者

北海道内で母子保健相談を5年以上経験してい

る者

4. データ収集方法

知り合いを通じてインタビューを依頼し、半構成的面接を行い、研究協力者の承諾を得て面接内容を録音した。

- 1) データ収集期間:平成23年9月－11月
- 2) 面接内容;
 - (1) 育児中の親が日ごろ抱えている心配や困りごと。
 - (2) 育児中の親や育児協力している現代の家族に対して感じていること。
 - (3) 現代の親への育児支援について、今後必要と思われること。

5. データ分析方法

録音したデータから逐語録を作成し、面接内容に添って育児中の親の抱えている心配や困りごと、育児中の親や協力している現代の家族に対して感じていること、今後の育児支援に必要とされることに焦点を当て、意味ある分節で区切りコード化した。そして意味内容の類似するものを合わせてサブカテゴリーとし、サブカテゴリーを統合、再編しながらカテゴリーを抽出しラベル化した。分析にあたっては、共同研究者間で納得いくまで検討を繰り返し妥当性の確保に努めた。

6. 倫理的配慮

研究協力者には、研究の目的と方法、匿名性の保証、研究途中でも協力を辞退できることの自由、研究結果の公表などについて、研究者から文章と口頭で説明して、書面にて同意を得た。面接場所は研究協力者のプライバシーが確保でき、話しやすい場所を設定した。

IV. 結果

本研究の趣旨を理解し、研究者が行う面接に同意が得られた協力者は3名である。研究協力者の年齢は、47歳－63歳で平均56歳、相談経験年数は5年－11年で平均7年、全員女性であった。面接時間は47分－70分で平均55分であった。

分析の結果、173の意味内容コードを抽出した。

抽出された意味内容コードを分類統合した結果、育児中の心配・困りごとは13のサブカテゴリー、5つのカテゴリー、育児中の現代の家族については12のサブカテゴリー、3つのカテゴリー、今後、必要とされる育児支援については7つのサブカテゴリー、2つのカテゴリーが抽出された。(表1)

面接内容から、母子保健相談員から見た現代家族の育児の様相のサブカテゴリーとカテゴリーを表1に示す。抽象度の高い順にカテゴリーは【 】, サブカテゴリーを< >, 相談員の語りを「 」、相談員が語る母親や家族の言葉を『 』で示し、不足な言葉を()で補った。

1. 育児中の親の日頃の心配・困りごと

1) 【過度にアトピーを心配】

相談員は、母親が子どもの皮膚について<普通の肌でもアトピーの不安・心配>があり子どもの皮膚の僅かな変化でもアトピーを敏感に疑い、<病院受診の迷い>が生じていると感じていた。

「肌は全然きれい、ちょっとカサカサ、『これってアトピーですよ、病院行って診てもらったらいいでしょうか。治療したほうがいいでしょうか』と聞いてくるんです」。

「本当に健康ったら変ですけど、普通の肌っていうか、赤ちゃんって湿疹できますよね、乳児湿疹とか、どの子でもあるようなものでも、すごくアトピーじゃないかって不安が、そういう人が多いような気がします」。

2) 【離乳食の悩み】

相談員は、母親が離乳食について母親の思うように<離乳食を食べてくれない>『何を食べさせたらいいのか、どのくらいの硬さで、量はどのくらいとか<略>』<離乳食がうましくない>ことに悩んでいる事を感じていた。

3) 【ママの資格に関わる母乳の出方】

多くの母親が母乳のトラブルを抱えていた。相談員は<おっぱいが出が悪い>と「ママはどうしてよいかわからない、足りているかどうか分からなく結構深刻ですね」。飲んでくれない原因は<おっぱいがおいしくない>と母乳の味が悪い

表1 母子保健相談員からみた現代家族の育児の様相

項目	カテゴリー	サブカテゴリー	
心配・困りごと	過度にアトピーを心配	普通の肌でもアトピーの不安・心配	
		病院受診の迷い	
	離乳食の悩み	離乳食がうまくいかない	
		離乳食を食べてくれない	
	ママの資格に関わる母乳の出方	おっぱいが出が悪い おっぱいがおいしくない ミルクを足すことへのジレンマ	
体重増加は関心の的	子どもの体重を気にする親の増加 太りすぎはカッコ悪い 太りすぎを気にするのはスリムなママ		
健診は合否判定の場	健診後の数値の確認		
	健診前に成長を確認		
	健診で何言われるか心配		
育児中の現代家族	育児を知らない・子どもと関われなママ	子どもと遊べない・相手ができない マニュアル化して混乱する 人との関わりの希薄さ 親側に立った一生懸命 自分のしたいことができないストレス 子どもにイラつき怒る	
		ママの代わりができるパパ	ママに協力的なパパ 育児に一生懸命なパパ 上の子の育児はパパ
			介入し過ぎる祖母・しない祖母
育児支援	安心を与える育児支援	ポジティブに受け止める 聞いてもらおうと安心できる 一緒に育児して見せる ゆとりをもたらす祖母の適度なアドバイス	
		親が育ち合える場の必要性	赤ちゃんに触れ合う機会の必要性 人との繋がり遊ぶ場を求めている ママたちが集い合う場の地域差

と思っている母親がいること、「体重の増えも悪いし（生まれて）1カ月くらいであれば自分で考えていた母乳育児への思いがあり、母乳で育てたいと思っているのに足りるほど出なかった。この月数でミルクを足したらいいのか、自分のおっぱいが出ないのは母親としての資格がないと思うように母親は〈略〉」、〈ミルクを足すことへのジレンマ〉が生じ深刻な悩みになっていると捉えていた。

「おっぱいはみんながみんな出るわけじゃない。ただ、（母乳が出なくても、出るように）お母さんががんばったことが偉い、素晴らしいんです。

そういう話をしますけど、おっぱいが出ないのは、母親として、その子に…罪悪感を持たせる。自分のおっぱいが出ないのが母親の資格がないというか、母親として失格っていうか、そう思っているんです」。

4) 【体重増加は関心の的】

子どもの体重の増加は母親の関心の的になっていた。相談員は〈子どもの体型を気にするのはスリムなママ〉で、母親は子どもの〈太り過ぎはカッコ悪い〉と思い、〈子どもの体重を気にする親が増加〉していることを感じていた。

「体重は、昔はちゃんと育てているかな、（増え

具合は) どうかになって、いうところが(母親の)心配だったけど、今は反対に太りすぎていたら困るんだというお母さんが結構いますね」「おっぱいだけ、母乳だけでやっているのに、こんなに太っていいの」(太っていなくても)『太ってるんです。太ってるんです』と言いながら(子どもを)体重計に乗せていて、さりげなくお母さんの体型を見ると、スリムなお母さんで、スリムな親ほど気にしているというか、自分がきれいでスタイルが良くて、それで太っていることがカッコ悪いと思っているイメージがあるようで〈略〉「体重の増え方とか、適正に増えているのかとか、すごく関心がありますね」。

5) 【健診は合否判定の場合】

母親は乳幼児健診の前または後に、子どもの身長・体重を確認するために相談コーナーを訪れていた。相談員は、母親が乳児健診後の数値が納得できない時に〈健診後の数値の確認〉に来ること、またそれ以上に〈健診前に成長を確認〉するために身体計測に訪れる母親が多いと感じていた。さらに母親は保健師から〈健診で何言われるか心配〉しており、健診は母親にとり育児の合否を判定される場になっていた。

「子どもの健診前に身長、体重を測定に来る母親が多いんです。最近、気になっていることは、体重測定前に(母親に)月齢を聞くと『もうすぐ4カ月なんです』って言うので、健診に行ってきたんですかって聞いたら『明日です』とか、そんなママが結構いて、何も明日健診なら、今日、来なかったっていいと思うのですが、健診に行く前に、まず、確かめておきたいっていうか、〈略〉「体重が太り過ぎていなくて、安心感を得たいというのか、『健診で何て言われるんだろう、何か言われたらいやだな』と思って〈略〉、健診ですべてOKと言われたら、100点満点だよって言われたら気持ちなのかなと思いますね」。

2. 育児中の現代の家族について

1) 【育児を知らない・子どもと関われないママ】

相談員は、母親が育児に一生懸命であるが、親

の生活リズムに子どもを合わせる、子どもに過度に期待をかけるなど〈親側に立った一生懸命〉であること。育児のために〈自分のしたいことができないうストレス〉を抱え、〈子どもにイラつき怒る〉、育児書通りにいかず〈マニュアル化して混乱する〉、子どもと二人になると〈子どもと遊べない、相手ができない〉など、育児を知らない、子どもと関われない母親が増加していることを感じていた。相談員は、このような母親達は、小さい時から子どもとの関わりや親と思いきり遊んでもらった経験がないなど、母親が育ってきた過程で〈人との関係の希薄さ〉があると捉えていた。

「一生懸命なんだけど、それが行き過ぎちゃって、過度に期待したりとか、本当に子どもにとって大事なことは何なのかを、ちょっと忘れてしまっていて〈略〉」「お母さんがそこまでイライラしてガツンとメタメタに怒るといのか、感情を交えて『もう、あんたなんか連れて歩かない〈略〉』」「前は『育児が大変、したいことができない、夜寝れない、寝れないから泣きやむ方法を教えて欲しい』とか、そんな感じだったんですけど、最近ではもう赤ちゃん自体が分からないっていうか、どうしていいのか分からない。今まで2・3カ月育ててきても、どうしていいのか、どう関わっていいのか分からないって、どう遊んでいいのか、そんな感じのお母さんたちが増えてきているなと思います。」「『うちに玩具が何十個あるんですけど、これでいいでしょうか』と聞いてくるんです。ママ達は『(子どもと) 1対1になった時にすごく時間が長く感じる』って、『どうやって相手をしていいのか分からない』って言うんですよ」「いままで(赤ちゃんを) 見たことないのでしょね。周りにもいないし、初めてだし、人との関わりも求めなくなって来たっていうか、関わりも希薄になってきた気がして〈略〉自分ひとりの時に泣いてる赤ちゃんをどうしていいか分からない、泣いていたら、どこかスイッチを押したら泣きやむとか〈略〉、育児書通りに3時間おきに赤ちゃんが飲

むはずなのに、飲まないとか、そんな捉えのお母さんたちが増えてきたなと思うんです。説明書みたいのが欲しい、マニュアル化している、そんな印象です」「ママ自体も、自分の子ども時代にすごく楽しかった事とか、心地よかった事とか、思いつき親から遊んでもらったことがないとか、記憶や体に残るものがだんだん薄くなってきているから、余計自分の子どもに伝えられなくなってきているのかなって感じますね」。

3) 【ママの代わりにできるパパ】

<育児に一生懸命なパパ>は母親よりも子どもの事を知り、下の子が生まれるとく上の子の育児はパパ>が行い、母親に指示されると<ママに協力的なパパ>になり、相談員は、現代の父親は育児に関心を示し、一生懸命に育児をして家事も育児もママの代わりにできるパパになっていると捉えていた。

「お父さんたちはお母さんよりもいろいろ知っていて、質問してもお父さんが答えたりとか、あー良く（子どもの事を）知っているんだと思います」、「一生懸命おむつ替えている、昔のパパに比べて、手が空いている限りは自分でやる思いでいるパパが多いです」「働いているお母さんが増えていて、家事、育児は一緒にやるものというのが、身についている」「お父さんがミルク飲ませたり、おむつ取替えたり、お母さんの指示のもとに、そういう光景は、今、どこでもそうなのかもしれません」。

4) 【介入し過ぎる祖母、しない祖母】

相談員は今の祖母は、育児に興味関心のあるあまり<自分が育児をやりたい祖母>、自分の育児経験から母親に<自分の育児を押し付ける祖母>、その一方で<時代の違いを気にする祖母>は育児には介入せず、祖母の育児協力姿勢は両極化していると捉えていた。

「おばあちゃんも本当に育児に関わりたがっています。自分が育てたい……みたいな、お父さんもお母さんもお若いでしょう。そして自分が以前、子育てを経験しているから、もうお母さんに介入

したくてたまらなくて<略>」「孫の育児について振り回し過ぎてるといふか、例えばおむつにしても『私なんか1歳の時には取れていたんだよ、もう取りなさい』とか食べ物も『口でクチュクチュしてあげたんだから、そんな面倒なことしなくてもいいんだよ』と自分の育児を押し付け過ぎる」「『私は昔の人間だから、あれやこれや言わないようにしているの、今は、時代が違うのだからね』って<略>」「お母さんが悲鳴をあげているのは、祖母（の育児協力姿勢）が両極にあるからですね」。

3.今後の育児支援について

1) 【安心を与える育児支援】

相談員は母親に安心を与える育児支援が重要であると考えていた。相談員の育児支援は、母親の話を良く聞くことで母親は<聞いてもらおうと安心できる>、母親が子どもからサインをくみ取れるように子どもの様子を伝えながら<一緒に育児して見せる>、母親が<ポジティブに受け止められる>ように言葉をかけ関わっていくことであった。さらに母親に安心をもたらし為には<ゆとりをもたらし祖母の適度なアドバイス>があることが大事であると感じていた。

「ママの話を良く聞くこと、ほとんどの人はほっとする、胸のつかえが取れたみたいに喜んで、帰っていく」「育児って大変なものなんだよ。赤ちゃんは泣くんだよってというような言い方をするようにしています。一緒に育児して、ほらこんな風に抱いてあやして、そしたらこんな風に泣きやむんだよ。このくらい泣いたらおっぱいなんだよ。おなかですいているサインなんだよって。赤ちゃんからいっぱいサインが出ていること、そうするとお母さんたちの意識も変わってきているように思います」「『おいしくないおっぱいじゃないか』って（心配するママには）体重を見て増えていればこんなに増えているね。飲んでるねって、やっぱり、赤ちゃんが大きくなっていけば、そこで安心。ママは自分の授乳が良かったんだと思えば、そこで安心<略>」「ずっとこのまま（肥満）じゃないよって、身長も伸びるし、バランスも取れてくる。

まあ、大丈夫というか、安心、安心感を持たせること、それが一番〈略〉「ママには誰か支えになってくれる人がいるとゆとりが出ます。ママは沢山情報は持っているの。どうしていいかわからない時はおばあちゃんがちょっとアドバイスしてあげるのがいい」。

2) 【親が育ち合える場の必要性】

相談員は、子どもを知らない関われない母親が増えていることで、幼少の時から〈赤ちゃんに触れ合う機会の必要性〉があると考えていた。そして現代の母親は〈人との繋がり遊ぶ場所を求めている〉、地域によっては盛んに子育てサロンなどが行われている地域とあまり実施されていない地域、また母親が遠隔で参加できない地域など〈ママたちが集い合う場の地域差〉がある。そのため、もっと親の身近に子育て支援の場が多くあることで親たちが繋がり育ち合えると感じていた。

「お友達と遊ばせる場所も、親とか、ママ友もすごく求めているし、みんなで集まって子育てできるでしょう。公園にしても、特に冬場になるとどうやって遊んだらいいのかわからないっていう感じですね」「親たちの中でいろんな人と繋がっていて、そこで、ママ流の遊び方、子どもとの接し方ってあって、学び合っているところがある」「子育てサロンにしても、区の中でもちょっと偏りがあるし、困っているというか、あまり関われない距離的に遠かったりして、すぐに来れないママ達がいるし、どんどん一緒に集まればいいのかもしれませんが、なかなかそうできないでいますね」。

V. 考 察

1. 育児中の現代家族の様相

育児中の現代の家族について、父親は【ママの代わりができるパパ】になっていた。一生懸命に子どものおむつ替え、上の子の面倒を見て、特にママには協力的に働き、相談員からの質問にもパパが答えるほどに子どもの事を解っていた。父親の育児協力については、ここ20年で大幅に増加

している調査結果⁴⁾もあり、現代の父親は母親に協力しながら、一生懸命に育児を行い育児ができた父親に変化していると言える。

その一方で相談員は、母親も一生懸命ではあるが【育児を知らない・子どもに関われないママ】であるとみていた。母親の一生懸命さは子どもに過度に期待をかける、生活リズムを親に合わせるなど親側に立った「子ども不在の一生懸命さ」であった。さらに育児書に頼り、その通りに事が運ばない時は、どうしてよいのか分からず、子どもとの遊び方や泣いている時の対応など、一つひとつに困惑して右往左往している様子が相談員の語りから映し出された。相談員は、現代の母親は育児を知らない・子どもと関われないと捉えており、その背景には人との関係の希薄さ、子どもと関わった経験のなさをあげていた。この結果は、先行研究においても、乳幼児を全く知らないまま親になる母親達が増え、現代日本における子育ての困難さは親が乳幼児を知らないことが要因となっている⁵⁾とされ、本研究の結果はそれを裏付ける結果となった。

育児を知らない子どもと関われない母親にとり、母親の身近に相談相手がいることは育児を行う上では重要となってくる。先に、父親は育児に協力的な傾向に変化したことを述べたが、先行研究では「育児の手助け」は「夫」「母方の祖父母」「兄弟姉妹」の順に多いが、母親が「育児について心配な時に頼りにする人」は、夫はここ20年で減少して母方の実家が非常に多くなっている⁶⁾。本研究では祖母の育児協力は、【介入し過ぎる祖母、しない祖母】であり、祖母は母親に自分の育児を過度に押し付けてしまう。また反対に時代が違うという理由で育児に介入しようとししない両極化の現象がみられている。母親が頼りにする実家の祖母が介入し過ぎる場合は、母親の混乱を助長している。また頼りにしても介入してもらえない場合は、祖母が経験している育児のちょっとしたコツも伝わっていかない。

現代において、祖母からの育児の伝承を得るた

めには、祖母の育児介入への意識改革や介入方法の改善が必要となってくると考える。

2. 乳児の肥満を嫌う母親たちの増加

相談員は母親たちは子どもの【体重増加は関心の的】であると語った。母親は「子どもの太り過ぎは困る、子どもの太り過ぎはカッコ悪い」と肥満になることが気になり体重を測っていた。最近では社会が肥満していることより、やせていることに価値観を持ち、これと相まって母親が「自分の子どもが肥満する」ことを嫌う傾向がある⁷⁾。本研究からも母親は体重計に子どもを乗せながら「太ってるんです、太ってるんです」と恥ずかしそうに気にしながら測る。「おっぱいだけ、母乳だけやっているのに、こんなに太っていいの」と子どもが肥満になることを非難する思いを持ち、母親が子どもの体型と一体化して恥ずかしさや嫌悪感を抱いている。やせに価値観を置く時代の風潮が、乳幼児の体重増加への母親の意識にまで影響を与えている。

2. 育児評価が気になる、育児に自信がない母親たち

相談員は母親が母乳についての悩みが多いと捉えていた。先行研究においても、母親の悩み、気がかりは母乳や食事が上位⁸⁾であった。母親達は泣いている子を前に、母乳が足りているのかどうか分からない、自分のおっぱいの味が悪くて子どもが飲まないのではないかと、ミルクを足した方が良いのか、しかし母乳が出ることは母親としての資格でありミルクを足すことは母親失格になるのではないかという思いで、母乳は母親の資格と関係し自信に直結する重大な問題であった。

さらに、相談員が最近の母親の気になる傾向として、乳幼児健診を目前にして我が子の身長体重を測定に来る母親たちがいることである。母親たちは「健診で何を言われるだろう、100点満点取れるだろうか、保健師にOKと言ってもらえるだろうか」と、あたかも育児試験を受けに行く思いである。乳幼児健診は我が子の成長を知る場であるが、現代の母親にとって自分の育児に点数をつ

けられる場、育児評価が下される場となっていた。原田は現代の親たちは親や大人の中で育った世代であり、他者の評価がすごく気になる「ほめて欲しい」という承認欲求がある⁹⁾と述べている。小野は1歳6カ月健診での母親の様子を母親は自信がなく、保健師から言われることは母親としての自分が傷つく、健診は緊張し、母親として何か指摘されるような不安が強い。何か言われぬように積木の練習をしていたり、言葉数を少し水増ししたりする¹⁰⁾と述べている。

育児を知らない子どもと関われない現代の母親は、自分なりに模索しながら孤軍奮闘して子育てを行っている。日々の育児では、子どもが這う、歩くなどの目に見える成長を感じていたとしても、人との関係の希薄さから「良く育っているね」「うまく育てたね」等の育児を認められる、誉められるなど、自信につながる経験を親たちは持っていない、または少ないのではないかと思われる。また同じ子育て中の母親と一緒に子どもの成長を確認して喜びあえる体験が少なく、母親は我が子の成長を実感として感じ取れていないのではないかと考える。さらに、毎日の育児の中では、子どもの対応に困ったり悩んだりすることが多く、そのことは母親の育児の不安を増すことになる。そのため乳幼児健診を目前に、合格点が取れるか心配で事前確認の行動に至っていたのではないかと考えられる。

3. 家族のサポートと身近に育児を学び合える場の必要性

自信のない母親に対して、相談員は、母親が自分の子育てをポジティブに受け止められるように言葉かけを行い、母親と一緒に子どもと関わり、子どもの反応を親に伝え、子どもの出すサインを母親が感じ取れるように支援していた。そのことにより母親の意識が変化し自信につながっていると相談員は感じていた。大久保は「子どもに応じてしてあげる」ことが母親としての重要な関心事である¹¹⁾と述べている。子どもからのメッセージを受け取り、理解して、子どもに回答して

いく、という子どもとの相互作用を土台として、母親の自信が生まれてくると考える。また、岩崎らのMaternal Confidence（母親としての自信）を高める研究では、母親の行動に対する努力を認め、能力があることを言葉や態度で示し、同時に精神的にも信じ、認め、支援することが直接的に影響している。第一義的な親密層である家族が母親や育児に注目して好意を示しサポートを提供されること¹²⁾と述べ、母親の自信には家族の精神的サポート、支援の重要性が強調されている。家族は母親の育児の自信を高める重要な役割を担う存在である。現代の家族は、父親の育児協力が得られてきているが祖母の介入の在り方が課題になった。少子化時代の子育ては、2世代目に入り、子育てを支えるべき祖父母も子育て経験が乏しい現状である。つまり、祖母も育児の経験や技術を伝承するだけの経験を持ち合わせてはいることが考えられ、育児を思い出し学ぶ場が必要になってきているのではないだろうか。最近では、祖父母向けにも育児講座¹³⁾が開催され、今後は世代を越えて家族と一緒に育児を学び、家族で子どもの成長を感じ喜びあえる場が必要になってくるのではないかと考える。

VI. まとめ

母子保健相談員は現代家族の育児様相について次のように捉えていた。

1. 父親は、一生懸命に育児に協力して、ママの代わりにできるパパになっている。
2. 母親は、子どもと遊べない、泣いた時どう対応してよいか分からない等、育児を知らない、子どもとかかわれない状況がある。その背景には、人との関係の希薄さや子どもと関わった経験が乏しいことがある。
3. 祖母は、育児に介入し過ぎる祖母と介入しない祖母の両極化している。
4. 母親は子どもの肥満に嫌悪感を抱き、乳児のうちから体重増加を気にかけている。
5. 母乳の出方は母親としての資格に関わり母親

としての自信を失う要因になっている。

6. 乳幼児健診は母親にとって育児評価の場であり、事前に身長、体重を確認する行動に至っている。

7. 現代の母親は育児に自信がない。安心を与える育児支援が必要である。

育児支援への示唆

現代の母親の育児は自信を高めることが必要で、そのためには家族のサポートが重要で祖母の育児介入への意識や方法を検討していく必要がある。また、もっと身近に育児中の親が気軽に集い学び合える場や、世代を超えて家族皆で育児を学ぶ場が求められている。

文献

- 1) 厚生労働省：平成23年度版厚生労働白書。15-18, 64-70, 166-175, 東京, 日経印刷, 2011.
- 2) 加藤則子：育児支援の現状と課題。小児保健研究70刊記念号：3-4, 2011.
- 3) 今井充子, 常盤洋子：我が国の行政による子育て支援の視点と課題に関する文献検討。北関東医学 61 (3) : 377-386, 2011.
- 4) 原田正文：子育ての変貌と次世代育成支援。163-172, 名古屋, 名古屋大学出版会, 2007.
- 5) 原田正文：子育ての変貌と次世代育成支援。138-161, 名古屋, 名古屋大学出版会, 2007.
- 6) 原田正文：子育ての変貌と次世代育成支援。173-184, 名古屋, 名古屋大学出版会, 2007.
- 7) 生魚(澤村) 薫, 橋本令子, 村田光範：学校保健における新しい体格判定基準の検討。一新基準と旧基準の比較、および新基準による肥満傾向児並びに痩身傾向児の出現頻度にみられる198年から2006年にかけての年次推移について—小児保健研究 69 (1) : 6-13, 2010.
- 8) 財) 母子衛生研究会編：母子保健ハンドブック2010。302-305, 東京, 母子保健事業団, 2010.

- 9) 原田正文：子育ての変貌と次世代育成支援.
210-226, 名古屋, 名古屋大学出版会, 2007.
- 10) 小野良子：保健センターでの子育て支援.
臨床心理学 4 (5) : 591-595, 2004.
- 11) 大久保功子：初めての子供を持った夫婦の
出産後3カ月の経験世界一親になると言うこ
と. (1)、神戸大学医学部保健学科紀要 12 :
85-92, 1996.
- 12) 岩崎順子, 野嶋佐由美：Maternal Confidence
と家族サポートの関連. 家族看護5 (1) :
100-110, 2007.
- 13) 「孫育て」楽しく祖父母向け講座：室蘭
市、北海道新聞朝刊地方（室蘭・胆振）
2011.5.21.

Aspects of Parenting by Modern Families as noted by Maternal and Child Health Counselors

NAGATANI Tomoe, SASAKI Yoko and MURATA Akiko

Abstract: This study sought to obtain suggestions for parenting support for families based on aspects of parenting by modern families as noted by maternal and child health counselors. Semi-structured interviews were conducted with 3 counselors who provide advice on maternal and child health. Based on the results, concerns of or troubles facing modern families were “excessive concern about atopy,” “worry about the introduction of solid foods,” “expression of breast milk as it relates to a woman’s fitness as a mother,” “focusing on weight gain,” and “passing or failing a health checkup.” Thoughts about families parenting a child were “a mother who lacks knowledge of parenting and who is not involved with her child,” “a father who can take the place of the mother,” and “a grandmother who meddles and one who does not.” Views on parenting support were “parenting support that provides peace of mind” and “the need for parenting by both parents.” Aspects of parenting by modern families were found to be a father helping to parent with a mother, a strict dichotomy of a grandmother who meddles versus one who does not, a mother’s involvement with her child at an undetermined level, a self-centered parenting approach, and concern about how one’s parenting is assessed. Results suggested that future parenting support requires parenting support that puts the mother at ease and intimate settings in which multiple generations of the family are assembled and both parents parent together.